少年の日の思い出 (1)

ヘルマン・ヘッセ
高橋 健二 訳

(ある日の夕暮れ、「私」は書斎を訪れていた友人に、ちょうの収集を見せました。次の文章は、ちょう集めをしている「私」に、友人(僕)が語った少年の頃の思い出です。)

僕は、八つか九つのとき、ちょう集めを始めた。初めは特別熱心でもなく、ただ、はやりだったのでやっていたまでだった。ところが、十歳ぐらいになった二度目の夏には、僕は全く①この遊戯のとりこになり、ひどく心を打ち込んでしまい、そのため、他のことはすっかりすっぽかしてしまったので、みんなは何度も、僕にそれをやめさせなければなるまい、と考えたほどだった。②ちょうを採りに出かけると、学校の時間だろうが、お昼ご飯だろうが、もう、塔の時計が鳴るのなんか、耳に入らなかった。休暇になると、パンを一切れ※胴乱に入れて、朝早くから夜まで、食事になんか帰らないで、駆け歩くことがたびたびあった。

今でも、美しいちょうを見ると、おりおり、あの熱情が身にしみて感じられる。そういう場合、僕はしばしの間、子供だけが感じることのできる、あのなんともいえない、むさぼるような、うっとりした感じに襲われる。少年の頃、初めてキアゲハにしのび寄った、あのとき味わった気持ちだ。

※胴乱…採集したものを入れる容器。

語り手

物語や小説がある人物の視点から語られているとき、その人物を**語り手**という。『少年の日の思い出』では、前半(現在)と後半(回想)で語り手が変化している。

確認テスト 本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) ――線①「この遊戯」とは何か。本文中から五字で書きぬきなさい。

□□□□□

(2) ――線②「ちょうを採りに出かけると……耳に入らなかった」とあるが、これはなぜか。適当なものを選びなさい。

ア 他のことが気にならなくなるほど、ちょうを採ることに夢中になっていたから。

イ みんながちょうを採るのをやめさせようとするので、耳をかさないようにしていたから。

ウ 休暇なので、学校や昼食、塔の時計の音などを気にすることなくちょうを採ることができたから。

〔　〕

(3) 「僕」はちょうの収集の思い出についてどのように語っているか。本文の内容に合うものを選びなさい。

ア 「僕」は少年の頃、熱心にちょうを集めており、今でもちょうを見ると当時の熱情を思い出す。

イ 「僕」ははやりだったのでちょうの収集をやっていたが、今では当時の感情を思い出せない。

ウ 「僕」はちょうを採るのに夢中でみんなに迷惑(めいわく)をかけてしまい、ちょうを見ると反省の思いが込み上げる。

〔　〕